

第1コリント書1-4章の修辞学的分析

——神学議論としてのアイロニー(1)*——

山田 耕太

1. 研究史概要⁽¹⁾

第1コリント書は⁽²⁾、19世紀のF. C. バウルとテュービンゲン学派以来⁽³⁾、議論を呼んできた。バウルはコリント共同体の分裂という問題に対して、ユダヤ主義的キリスト教のペトロ派と異邦人キリスト教のパウロ派の対立を見たが、20世紀に入り宗教史学派の影響でユダヤ主義的キリスト教との対立は、グノーシスの熱狂主義とパウロの問題に置き換えられた⁽⁴⁾。しかし、1950年代末にこれが修辞学的問題であることに着目したのはJ. ムンクである。ムンクはバウルが主張したようにペトロ派というユダヤ主義が問題なのではなく、アポロ派が問題であり、コリントではキリスト教がギリシア社会での修辞学的な「知恵」として理解されていたと正しく指摘した⁽⁵⁾。ただし、分派がなかったというムンクの主張はC. K. バレットやN. A. ダールが訂正し⁽⁶⁾、後者は第1コリント書1-4章がパウロの「弁明」であると主張した⁽⁷⁾。さらに、1960年代から70年代にかけて、シュミットハルスのグノーシス理論とは対照的にパウロをヘレニズムの文化的状況、とりわけソフィストとの関係を示唆して修辞学的文化的状況に位置づけたのはジャッジである⁽⁸⁾。

本稿ではこの古くて新しい問題に修辞学の新しい視点でアプローチを試みる。だが、本稿での問いは次の点である。すなわち、第1コリント書1-4章の議論で、パウロはどのような修辞学的概念を、どの程度、どのように具体的に用いているのか。本論に入る前に、修辞学的議論の研究史を簡単に整理しておきたい。

19世紀末に修辞学的批評の特に修辞的文彩表現(スタイル・措辞)の視点でパウロ書簡を分析したのは、J. ヴァイスである⁽⁹⁾。ヴァイスは第1コリント書1-4章の分析では、数多くの対置的表現や並置的表現や修辞疑問の他に、語頭畳音、語尾音反復などの多様な文彩表現が用いられていることを指摘した⁽¹⁰⁾。だが、20世紀初頭にその弟子のR. ブルトマンが最初期にパウロ書簡における「ディアトリベー」⁽¹¹⁾を指摘した後は、文彩表現の問題は今日までほとんど無視されてきた。

20世紀初頭まで記憶されていたパウロ書簡の修辞学的分析が復活されたのは1970年代末にW. ヴェルナーによってである。ヴェルナーは、第1コリント書の修辞学的議論で、「逸脱」に役割を強調して本論の議論の種類が議会弁論（助言的弁論）ないしは演示弁論であるとし⁽¹²⁾、また議論の展開における修辞学的疑問の重要性を指摘した⁽¹³⁾。これに対して、M. ビュンカーは1:10を第1コリント書の「命題」とし、それを展開している1章-4:21と15章を書簡理論と修辞学の視点で分析し、ダールの主張を支持して、第1コリント書の修辞学的議論が法廷弁論の弁明であることを表明した⁽¹⁴⁾。

ガラテヤ書の修辞学的批評に区切りをつけたH. D. ベッツは、第1テサロニケ書と第1、第2コリント書の修辞学的批評の問題に入り、第1コリント書に関して「言葉と知識」（1:5）は哲学者や雄弁家の「演説と知識」の問題であり、それが「自己讃美」（誇り）の問題と結びついていることを正しく指摘した。また神学的キー・コンセプトである「演説（言葉）」「知恵」「知識」の関係を修辞学の視点で解明した⁽¹⁵⁾。

これに対して、L. L. ウェルボーンはパウロの直面したコリントの問題は修辞学的視点だけでは解明できず、古代ギリシアの歴史家たちがポリスの「騒動」（stasis）に対して「一致」（homonoia）を促すポリスの政治理念を描いてきたことを念頭に入れなければならないことを指摘した⁽¹⁶⁾。ベッツの弟子のM. M. ミッチェルは、ウェルボーンの視点を取り入れて第1コリント書全体の修辞学的分析を詳細に行ない、修辞学的議論の一部には演示弁論も含まれているが全体では議会弁論（助言的弁論）であると結論づけた⁽¹⁷⁾。だが、S. ポグロフは第1コリント書1-4章が「修辞学的状況」を解明して、ウェルボーンの指摘した政治的状況は表面的であり、パウロの直面したのは「騒動」という政治的状況ではなく、「分派」という神学的状況であり、パウロもアポロもソフィストとして活躍することが期待されるコリントの文化的状況を反映していたとした⁽¹⁸⁾。

1990年代半ば以降、第1コリント書の修辞学的批評は深化して展開している。第一に、D. リトフィン第1コリント書1-4章の修辞学的分析で、パウロの宣教が「言葉の知恵」（1:17）や「優れた言葉や知恵」（2:1）や「人間的な知恵の言葉による教え」（2:13）によるのではなく、「霊と力の例証」（2:4）によることを明らかにする。そして、この背景にあるのは、ヘレニズムの会堂でも、グノーシスの密儀教でも、熱狂的なカリスマティカーでもなく、ギリシア・ローマの修辞学であることを明らかにする。しかし、パウロ自身は論敵と違って、比喩的表現・修辞的疑問・対置的表現などのコミュニケーションの一般的な手段を除いて、修辞学的議論の「典型的な例」を一

切用いていないと結論する。もし用いたのであれば、修辞学な「言葉の知恵」を用いなかったという主張に反すると考える⁽¹⁹⁾。

第二に、これに対して、B. W. ウィンターはパウロをアレクサンドリアのフィロンと比較し、両者とも紀元2世紀に盛んになる第2次ソフィスト運動の先駆けである1世紀のアレクサンドリアとコリントのソフィストたちの系譜を明かにした上で、フィロンとパウロをその系譜の中に位置付ける。さらに、第1コリント書1-4章をパウロの「弁明」とした上で、その主要な議論をソフィストの「身分」「倣い」「誇り」という視点から解明する。ウィンターによれば、論敵ばかりでなくパウロ自身もソフィストと同じように修辞学的議論を多用したということになる⁽²⁰⁾。

第三に、J. S. ヴォスは、1-4章の主要な議論である1:18-3:4をスタシス理論で分析し、パウロの宣教は「(理性的な)知恵の言葉によるのではない」(1:17)というアポロ派の主張を事実として認めず、パウロの宣教は愚かだという批判に対して、弱く見劣りする宣教が神の基準に適うと述べ(1:18-2:5)、またパウロが知恵の言葉を語らなかったという批判に対して、成人には知恵の言葉を語る(2:6-3:4)と述べて、パウロ自身からコリント人に「責任の転嫁」(status qualitatis, relatio criminis)をする⁽²¹⁾。J. シュミットはヴォスの研究を取り入れた第1コリント書1-4章の修辞学的分析を前提にして⁽²²⁾、ヴァイス以来無視され続けてきた修辞的文体の問題にも着目しながら、第1コリント書1-4章の修辞学的議論を演示弁論に分類する。そして、その主要な議論である1:18-31を「逆説的称賛」(enkomion paradoxon)に、2:6-16を「名誉の称賛」(enkomion endoxon)に、3:5-23を「対立した称賛」(enkomion amphidoxon)に、4:6-13を「不名誉の称賛」(enkomion adoxon)に分類する⁽²³⁾。

以上の議論で重要なのは、第一に、第1コリント書1-4章が法廷弁論の弁明なのか、議会弁論(助言的弁論)なのか、演示弁論であるのか、という修辞学的議論の種類の問題である。第二に、パウロは修辞的疑問、比喩的表現、対置的表現を含めて修辞的表現をどのようにどの程度用いているか、というスタイルないしは文彩表現(措辞)の問題である。第三に、パウロの論敵ばかりでなく、パウロが修辞的表現の「典型的な例」として、修辞的表現を用いているか否か、もし用いていれば何をどのように用いているかである。

2. 第1コリント書1-4章の修辞学的状況⁽²⁴⁾

コリントにはパウロが宣教したのちに、アポロとケファが宣教したと思われる。ヘレニズムのキリスト教とアレクサンドリアのキリスト教とパレスチ

ナのキリスト教が宣教された。コリントのキリスト教の共同体の分裂・分派の問題にはこのような違ったタイプのキリスト教が個性的な宣教者によって伝えられたことに起因している。しかし、この他に信者の社会層の違いや何軒かの家の教会に分かれていたこともその背景に考えられる。

1 - 4 章で主に議論されているパウロの論敵の特徴は、第一に、彼らが「知恵の言葉」を語ることにある。この「知恵」とは、「神の知恵」(1:21, 2:7, cf. 1:24, 2:6 a)「神からの知恵」(1:30)と対立する「この世の知恵」(1:20, 2:6 b, 3:19)「人間(から)の知恵」(2:5)「人間的な知恵」(2:13)「賢い者の知恵」(1:19)である。しかもこの「知恵」は「言葉」と結びつき(1:17, 2:1, 2:4, 13, 12:8)、しかも巧みな「優れた言葉」(2:1)や「説得的な言葉」(2:4)と密接に関係するが、「知識」とは結びついていない(12:8)。すなわち「言葉の知恵」(1:17)とは「修辞学的技巧」を意味する⁽²⁵⁾。以上のことから明らかのように、この「知恵」は、グノーシスとも⁽²⁶⁾ユダヤ教の知恵の伝統とも⁽²⁷⁾関係のないヘレニズムの修辞学の知恵の伝統と関わる問題である。それは「雄弁家」(18:24, *aner logios*; cf. 18:25, *zeon toi pneumati*)アポロと密接に関わっていたと思われる。

第二に、彼らは「知恵の言葉」を語るばかりでなく、自らが「賢い者」であり、「知恵の言葉」を語ることを「誇り」(1:29, 31, 3:21, 4:7)「高ぶる」(4:6, 18, 19, cf. 5:2)。彼らはパウロよりも優れた者であると自負し(4:6)、「十字架の言葉は愚かである」「パウロは知恵の言葉を語らない」とパウロを批判する(4:3-4, 7; cf. 2:14-15, 3:13-15, 4:5)。このように「知恵の言葉」すなわち「修辞学的技巧」で語る者が「誇る」という問題は、ベッツら多くの研究者が既に指摘しているように、修辞学プロパーの問題であった。また、「修辞学的技巧」で語る者を「賢い」とし、語らないものを「愚か」とするのも、修辞学プロパーの問題である。すなわち、雄弁家は演説によってその「賢さ」を「判断」され⁽²⁸⁾、「称賛」⁽²⁹⁾を受け⁽³⁰⁾、反対に過失があればそれは「愚かさ」によると見做された⁽³¹⁾。

第三に、彼らは「賢い者」であるばかりでなく、社会層が高い「力ある者」であり、「家柄のよい者」であったと考えられる⁽³²⁾。また、彼らは演説において他人よりも優れていることを示し、「称賛」を得ようとするが、それは同時に「妬みと争い」⁽³³⁾を引き起こす。また、彼らは社会層が高いばかりでなく「満腹している、大金持ちになっている、王様になっている」とパウロは批判する。これらの批判の言葉も修辞学的文脈に位置づけられる⁽³⁴⁾。

3. 第1コリント書1-4章の修辞学的構造

第1コリント書1-4章では、コリントの共同体で問題になっている分派の問題に対して「一致」を促す本論の冒頭の助言的文章（1:10, *parakalo*）が、パウロに倣うことを勧めた1-4章の結論の勧告的文章（4:16, *parakalo*）に「包摂」（*inclusio*）的に対応する⁽³⁵⁾。しかしここから、ウェルボーンやミッチェルが主張するように、1-4章が助言ないしは勧告であるとは言えない⁽³⁶⁾。この助言的勧告の部分は、5-14章の個別的・特定のな問題に対する勧告の最終的な結論（11:1, cf. 15:58, 16:13-14）を要約して先取りした部分であり、言わば第1コリント書の第二部で具体的に展開される結論である⁽³⁷⁾。さらに、1-4章には演示弁論の要素である称賛（1:4-9, 1:26-28, 2:6-7, 3:22-23, 4:5）や非難（1:13, 3:1-4, 4:7-13, 21）の文体も見られるが、シュミットが主張するように1-4章全体が称賛や非難の文体で書かれているわけではない⁽³⁸⁾。

第1コリント書1-4章の包括的・一般的議論で支配的なのは分派の問題であり、とりわけパウロ派とアポロ派の問題が取り上げられ（3:4-9, 4:6, cf. 1:12, 3:22）、「十字架の言葉」（1:18）と「知恵の言葉」（2:4, 13）の対立が議論されている。またそこでは、パウロの宣教の「十字架の言葉」が愚かであり（1:18）、パウロが「知恵の言葉」を語らなかったこと（2:6）への非難が前提にされている。反対に、彼らは「知恵の言葉」を誇り（1:29, 31, 3:21, 4:7）高慢になっている（4:6, 18, 19, cf. 5:2）。それに対するパウロの「弁明」⁽³⁹⁾が主要な論旨を構成し、それに対して言わば第一の「結論」（3:18-23）が述べられている。ここから、第1コリント書1-4章の修辞学的議論の種類は、議会弁論（助言的弁論）でも演示弁論でもなく、「弁明」という種類の法廷弁論であることが明らかである。

第1コリント書は手紙の前書き（1:1-3）の後に、感謝の祈り（1:4-9）が続くが、これは修辞学的な視点で見れば、修辞学的議論の序論に相当する。それ以後に手紙の本論（1:10-4:21）が続く。コリントの分派の問題を述べた報告とそれに対するコメント（1:10-17）は、修辞学的議論の中で問題が何であるかを述べた「陳述」に相当する。「序論」「陳述」の導入部に対して二つの「結論」（3:18-23, 4:14-21）が対応している。

第1コリント書でも「修辞的疑問」（*epitrothesis, erotema; interrogatio*）⁽⁴⁰⁾が重要である。主要な部分では「修辞的疑問」によって議論を始め、時には議論を終えるという問答による議論の方法、また議論の冒頭ないしは結論で「証拠」として旧約聖書を引用する議論の方法⁽⁴¹⁾が用いられている。

以下では、本稿で用いる重要な修辞学的概念を簡潔に述べる。

4. 第1コリント書1-4章の議論で重要な修辞学的概念

(1) 「パラドックス」

「パラドックス」(paradoxos logos; paradoxum)とは、「一般的な見解」(doxa)と「反対の」(para)の見解が原義である。アナクシメネースの『アレクサンドロス宛修辞学』では、「パラドックス」は「論証」で用いられる「実例」「証拠」「推論」「証言」などと並んで、「格言」の中で言及されている。また、「格言」とは「あらゆる行為に関して、表明した自分自身の意見である」と定義づけられている。そこでは、「世間一般の見解」と合致するものと、それに相反するものとに分けられるが、後者が「パラドックス」と呼ばれる。また、前者の場合は広く受け入れられているのでその理由を述べる必要がないが、後者の場合はその理由を述べる必要があると付言する⁽⁴²⁾。キケロの『ストア派のパラドックス』によると「パラドックス」の概念は拡張されて、相手の認める議論の前提から出発して、予想外の反対の議論に導くことを「パラドックス」と呼び、これはストア派が得意とする議論の方法であった⁽⁴³⁾。

(2) 「比較」⁽⁴⁴⁾

「比較」(synkrisis; conlatio, comparatio)も「論証」で用いられる推論の方法の一つである⁽⁴⁵⁾。『ヘレンニウス宛修辞学』では、法廷弁論などの論争的な議論で弁護する者に利益がある場合などに「比較」を用いる⁽⁴⁶⁾。キケロによれば、それには二種類あり、一方は一つのものが他のものと同一であるか相違するかを問うものであり、他方は一つのものが他のものに優るか否かを問うものである⁽⁴⁷⁾。また、紀元1世紀と推定されるテオンの『プロギュムナスマタ』によると、「比較」では、人物であれ物であれ、より良いものより悪いものを並べて議論し、特定の問題についての議論では、より優れた行為の優位性を述べるためにこの方法が用いられる⁽⁴⁸⁾。

(3) 「比喩」⁽⁴⁹⁾

「比喩」(metaphora; translatio)とは、元来、語彙の欠乏や貧弱さから生まれてきた言語表現である。それは言語表現に輝きを増すために他の言語表現を借用する方法であるが、「比喩」で最も重要な点は、元来の表現と借用する表現の間にある「類似性」にある。その特徴は、第一に、意味内容をより明瞭に示す点にある。第二に、イメージできない意味内容を鋭敏な感覚で視覚化する点にある。第三に、その簡潔な表現が端的に示す「生き生きとした表現」にある。「比喩」には、「隠喩(メタファー)」「直喩(シミル)」「寓喩

(アレゴリー)」などがある⁽⁵⁰⁾。

(4) 「アイロニー」⁽⁵¹⁾

「アイロニー」(eironeia; ironia) の原義は「反対のことを言う」である。アナクシメネースは『アレクサンドロス宛修辞学』で、「アイロニー」を「表面上は言わない振りをしながら、何かを言うことである。あるいは、物事を反対の言葉で表現することである。」と定義する⁽⁵²⁾。また、「非難の弁論においては、アイロニーの言葉を用いて、相手の誇りにしている点を嘲笑すべきである」と述べる⁽⁵³⁾。キケロによれば、「アイロニー」は「ユーモア」「ウィット」と並ぶ洗練された表現方法であるが、「全体的な口調によって戯れ」「言っていることと意味していることが別々である」と定義する⁽⁵⁴⁾。また、1世紀のエピクロス派のフィロデーモスが残した『修辞学』の断片によれば、「アイロニー」は「比喩」の一種に分類されている⁽⁵⁵⁾。さらに、クインティリアーヌスも、「アイロニー」は、本当の意味を隠す「比喩」の一種なのであるとする⁽⁵⁶⁾。だが、「アイロニー」は軽妙な表現や軽蔑の表現で本当の意味を隠して反対のこと言う点で、「隠喩」「直喩」「寓喩」などとは異なり、「類似性」とは反対の「差異性」が根底にある。「アイロニーの人」(eiron) は自らを低く評価して「自分自身を卑下する人」であり、その代表的な人物は、プラトン以来変わることなく、知者たちの中で無知の知により愚かさを装ったソクラテスである⁽⁵⁷⁾。以下では、第1コリント書1-4章の修辞学的分析を行なう⁽⁵⁸⁾。

註

* 本稿は2005年9月15-16日に同志社大学で開催された日本新約学会第45回学術大会で発表した拙稿の第1-4節を第一部として若干書き改めたものである。

- (1) 本稿での研究史概要は修辞学的批評を中心にしている。社会学科学的批評、フェミニズム批評を含めた第1コリント書の包括的な最新の研究史概要に関しては、以下を参照。D. G. Horrell & E. Adams, "The Scholarly Quest for Paul's Church at Corinth: A Critical Survey," E. Adams & D. Horrell (eds.), *Christianity at Corinth: The Quest for the Pauline Church*, Louisville: Westminster John Knox Press, 2004, 1-43; M. Y. MacDonald, "The Shifting Centre: Ideology and the Interpretation of 1 Corinthians," Adams & Horrell (eds.), *Christianity at Corinth*, 273-294; J. D. G. Dunn, "Reconstructions of Corinthian Christianity and the Interpretation of 1 Corinthians," Adams & Horrell (eds.), *Christianity at Corinth*, 295-310; M. M. Mitchell, "Paul's Letter to Corinth: The Interpretive Intertwining of Literary and Historical Reconstruction," D. N. Schowalter & S. J. Friesen (eds.), *Urban Religion in Roman Corinth: Interdisciplinary Approaches*, Cambridge, Massachusetts: Harvard Univ. Press, 2005, 307-338.

- (2) 第1コリント書1-4章は全体の包括的・一般的な議論であり、5-14(15-16)章はコリント人の口頭の訴え(5:1、11:18、cf. 1:11)と質問状(7:1、25、8:1、12:1、16:1、12)に答えた個別的・特定の議論である(cf. Cicero, *De Or.*, 2.10, 41-42; 2.17. 71-72; 2.19. 78)。5-6章が第2部を構成し、7-16章が第3部を構成する(例、H. Conzelmann, *Der erste Brief an die Korinther*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1969)のではない。7-16章を第3部とする考えは、J. C. Hurd, *The Origin of 1 Corinthians*, London: SPCK, 1965, の影響によると思われる。
- (3) F. C. Baur, "Die Christuspartei in der korinthischen Gemeinde, der Gegensatz des petrinischen und paulinischen Christentums in der alten Kirche, der Apostel Petrus in Rom," *TZTh* 5 (1831), 61-206, cf. idem, "The Two Epistle to the Corinthians," Adams & Horrell (eds.), *Christianity at Corinth*, 51-59.
- (4) W. Lütgert, *Freiheitspredigt und Schwarmgeister in Korinth: Ein Beitrag zur Charakteristik der Christuspartei*, Gütersloh: Bertelsman, 1908; R. Reitzenstein, *Die Hellenistischen Mysterienreligionen*, (3. Auf. 1928) Stuttgart: B. G. Teubner, 1956, 333-341; W. Schmithals, *Die Gnosis in Korinth: Eine Untersuchung zu den Korintherbriefen*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1956, cf. idem, "The Corinthian Christology," Adams & Horrell (eds.), *Christianity at Corinth*, 71-77; U. Wilckens, *Weisheit und Torheit*, Tübingen: J. C. B. Mohr [Paul Siebeck], 1959; R. McL. Wilson, "Gnosis at Corinth," M. D. Hooker & S. G. Wilson (eds.), *Paul and Paulinism: Essays in Honour of C. K. Barrett*, London: SPCK, 1982, 102-114; S. Arai, "Die Gegner des Paulus im 1. Korintherbrief und das Problem der Gnosis," *NTS* 19 (1972-73), 430-437. これに対して、以下はグノーシスの起源をユダヤ教知恵文学の伝統に求めた、cf. R. A. Horsley, "Gnosis in Corinth: 1 Corinthians 8. 1-6," *NTS* 27 (1981), 32-52, cf. Adams & Horrell (eds.), *Christianity at Corinth*, 119-128.
- (5) J. Munck, "The Church without Factions: Studies in 1 Corinthians 1-4," *Paul and the Salvation of Mankind*, London: SCM, 1959, cf. Adams & Horrell (eds.), *Christianity at Corinth*, 61-70.
- (6) C. K. Barrett, "Christianity at Corinth," *BJRL* 46 (1964), 269-297, cf. Adams & Horrell, *Christianity at Corinth*, 79-84; N. A. Dahl, "Paul and the Church at Corinth according to I Corinthians 1:10-4:21," W. R. Farmer, C. F. D. Moule & R. R. Niebuhr (eds.), *Christian History and Interpretation: Studies Presented to John Knox*, Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1967, 313-335, cf. Adams & Horrell (eds.), *Christianity at Corinth*, 85-95.
- (7) N. A. Dahl, "Paul and the Church at Corinth."
- (8) E. A. Judge, "Paul's Boasting in Relation to Contemporary Professional Practice," *Australian Biblical Review* 16 (1968), 37-50; idem, "St. Paul and Classical Society," *JAC* 15 (1972), 19-36.
- (9) J. Weiss, "Beiträge zur paulinischen Rhetorik," C. R. Gregory et al (eds.), *Theologischen Studien: Bernhard Weiss zu seinem 70. Geburtstag dargebracht*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1897, 165-247 = idem, *Beiträge zur Paulinischen Rhetorik*, Sonderdruck aus den *Theologischen Studien*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1897, 1-87 (頁は後者による)。Cf. C. F. G. Heinrici, *Der*

- erste Brief an die Korinther*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1896; E. Norden, *Die Antike Kunstprosa*, Bd.2, (Neunte Auf. 1909) Stuttgart: B. G. Teubner, 1983, 492-510.
- (10) Weiss, *Paulinischen Rhetorik*, 38-48.
- (11) R. Bultmann, *Der Stil der paulinischen Predigt und die kynisch-stoische Diatribe*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1910. ただし、S. K. Stowers, *The Diatribe and Paul's Letter to the Romans*, Chico: Scholars Press, 1984, は、ディアトリベーがストア・キュニコス学派のような遍歴哲学者たちが論敵を論駁する方法として用いたというブルトマンの結論は否定し、哲学の学校などで教師と生徒の関係で用いられていたと訂正する。
- (12) W. Wuellner, "Greek Rhetoric and Pauline Argumentation," W. R. Schoedel & R. Wilken (eds.), *Early Christian Literature and Classical Intellectual Tradition: In Honorem Robert Grant*, Paris: Editions Beauchesne, 1979, 177-188.
- (13) W. Wuellner, "Paul as Pastor: The Funktion of Rhetorical Questions in First Corinthians," A. Vanhoye (ed.), *L'Apôtre Paul: Personnalité, style et conception du ministère*, Leuven: Leuven Univ. Press, 1986, 49-77.
- (14) M. Bünker, *Briefformular und rhetorische Disposition im I.Korintherbrief*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1983.
- (15) H. D. Betz, "The Problem of Rhetoric and Theology according to the Apostle Paul," Vanhoye (ed.), *L'Apôtre Paul*, 16-48, esp. 24-39; cf. idem, *Der Apostel Paulus und die sokratische Tradition*, Tübingen: J. C. B. Mohr, 1972.
- (16) L. L. Welborn, "On the Discord in Corinth," *JBL* 106 (1987), 85-111, cf. idem, *Politics and Rhetoric in the Corinthian Epistles*, Macon: Mercer Univ. Press, 1997, 1-42, cf. idem, "Discord in Corinth: First Corinthians 1 - 4 and Ancient Politics," Adams & Horrell (eds.), *Christianity at Corinth*, 139-144.
- (17) M. M. Mitchell, *Paul and the Rhetoric of Reconciliation: An Exegetical Investigation of the Language and Composition of 1 Corinthians*, Tübingen: J. C. B. Mohr [Paul Siebeck], 1991.
- (18) S. Pogoloff, *Logos and Sophia: The Rhetorical Situation of 1 Corinthians*, Atlanta: Scholars Press, 1992.
- (19) D. Litfin, *St. Paul's Theology of Proclamation: 1 Corinthians 1 - 4 and Greco-Roman Rhetoric*, Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1994.
- (20) B. W. Winter, *Philo and Paul among the Sophists: Alexandrian and Corinthian Responses to a Julio-Claudian Movement* (2nd ed.), Grand Rapids: W. B. Eerdmans Publishing Co., (1997) 2002.
- (21) J. S. Vos, "Die Argumentation des Paulus in 1 Kor 1,10-3,4," R. Bieringer (ed.), *The Corinthian Correspondence*, Leuven: Leuven Univ. Press, 1996, 87-119.
- (22) J. F. M. Smit, "'What is Apollos? What is Paul?' In Search for the Coherence of First Corinthians 1:10-4:21," *NovT* 44 (2002), 231-251.
- (23) J. F. M. Smit, "Epideictic Rhetoric: In Paul's First Letter to the Corinthians 1 - 4," *Biblica* 44 (2003),
- (24) 第 1 コリント書の修辞学的状況については、cf. E. Schüssler Fiorenza, "Rhetorical Situation and Historical Reconstruction in Corinthians," *NTS* 33 (1987), 386-403, cf.

- Adams & Horrell (eds.), *Christianity at Corinth*. それに対する批判は、cf. D. L. Stamps, "Rethinking the Rhetorical Situation: The Entextualization of the Situation in New Testament," S. E. Porter & T. H. Olbricht (eds.), *Rhetoric and the New Testament: Essays from the 1992 Heidelberg Conference*, Sheffield: Sheffield Academic Press, 1993, 193-210, esp. 204-209.
- (25) Pogoloff, *Logos and Sophia*; Litfin, *St. Paul's Theology*; Winter, *Philo and Paul*.
- (26) Schmithals, *Gnosis*; Wilkens, *Weisheit* に反して。
- (27) Horsley, "Gnosis,"; Goulder, "Sophia,"に反して。
- (28) Cf. 2 :14, anakrinetai; 2:15, anakrinei; 2 :16, anakrinetai; 4 : 3 , anakritho, anakrino; 4:4, anakrinon.
- (29) Cf. 4 :10, endoxoi.
- (30) Cicero, *De Or.*, 1 . 33. 151-152.; *De Fin.*, 3 . 17. 56-57.
- (31) Cicero, *De Or.*, 1 . 27. 124.
- (32) G. Theissen, "Soziale Schichtung in der korinthischen Gemeinde: Ein Beitrag zur Soziologie des hellenistischen Urchristentum," *ZNW* 65 (1974), 232-272; cf. Adams & Horrell(fds.), *Christianity at Corinth*, 97-105.少数の影響のある高い社会層という Theissenの結論に対する批判は、cf. J. Meggitt, *Paul, Poverty and Survival*, Edinburgh: T. & T. Clark, 1998.それに対する再批判は、G. Theissen, "The Social Structure of Pauline Communities: Some Critical Remarks on J. J. Meggitt *Paul, Poverty and Survival*," *JSNT* 84 (2001), 65-84; idem, "Social Conflicts in the Corinthian Correspondence; Further Remarks on J. J. Meggitt *Paul, Poverty and Survival*," *JSNT* 85 (2003), 371-391. このような高い社会層の修辞学を含む教育的背景として、コリントのギムナジウムなどの教育制度の視点から第1コリント書を解明した研究は、cf. R. S. Dutch, *The Educated Elite in 1 Corinthians: Education and Community Conflict in Graeco-Roman Context*, London: T. & T. Clark International, 2005.
- (33) Plutarch, *De Frat. Amor.*, *Mor.* 485A-486D.
- (34) Cicero, *De Fin.*, 3 . 22. 75; Plutarch, *De Tranq. An.*, *Mor.* 472A.
- (35) Schrage, *Der erste Brief an die Korinther*, 1 . Teilband, *1 Kor 1 , 1 -6,11*, Zürich: Benziger / Neukirchen-Vluyn: Neukirchener, 1991, 352; H. Lausberg, *Handbook of Literary Rhetoric: A Foundation for Literary Study*, Leiden: Brill, 1998 (1960), § 625. この「結論」(4 :14-21) は第二の結論と言うべきで、1 - 4 章には第一の「結論」(3 :18-23) が述べられている。「十字架の言葉」の「福音」(1 :17, 4 :15, 9 :12-23, 15: 1 -11)、パウロの宣教の「弁明」(1 - 4 章、9 章)、「旅行計画」(4 : 17-21, 16: 5 -12) から明らかのように、1 - 4 章の議論は、9 章の「逸脱」を挟み込んで、15-16章の議論と対応しており、第1コリント書全体が「包摂」的な構造を示している。
- (36) Welborn, "Discord"; Mitchell, *Paul and the Rhetoric* に反して。
- (37) ここから Mitchell(*Paul & the Rhetoric*, 198-200) は、1 :10を手紙全体の「命題」(prothesis; propositio) と理解する。
- (38) Smit, "Epideictic Rhetoric," に反して。
- (39) Litfin, *St. Paul's Theology*, 160-173, esp.171; Winter, *Philo and Raul*, 181-183.
- (40) 1 :13, 20, 2 :11, 16, 3 : 4 , 5 , 4 : 7 , 4 :14-21, cf. *Ad Her.*, 4 . 15. 22-16. 24; Quintilian,

9. 2. 6-16; Lausberg, § 767-770; R. Dean Anderson, Jr., *Glossary of Greek Rhetorical Terms*, Leuven: Peeters, 2000, 51-52, 58; Wuellner, "Paul as Pastor"; D. F. Watson, "1 Corinthians 10:23-11:1 In the Light of Greco-Roman Rhetoric: The Role of Rhetorical Questions," *JBL* 108 (1989), 301-318.
- (41) 1:19 (イザヤ書29:14LXX); 1:31 (エレミヤ書9:23); 2:9 (イザヤ書64:3); 2:16 (イザヤ書LXX40:13); 3:19 (ヨブ記5:13); 3:20 (詩編93:11LXX)。
- (42) *Ad Alex.*, 11. 1.
- (43) Cicero, *Paradox Stoichororum*. proe., 4, "quae quia sunt admirabile contraque opinionem omunium"; cf. Cicero, *De Fin.*, 4.47; *De Inv.* 1. 3. 5.; Quintilian, 4. 1. 40. 尚、これはメランヒトンの時代には修辞学の方法として大いに用いられた。最近のパウロとストア派についての議論は、cf. T. Paige, "Stoicism, eleutheria and Community at Corinth," M. J. Wilkins & T. Paige (eds.), *Worship, Theology and Ministry in the Early Church: Essays in Honor of Ralph P. Martin*, Sheffield: Sheffield Academic Press, 1992, 180-193, cf. Adams and Horrell (eds.), *Christianity at Corinth*, 207-218.
- (44) Cf. C. Forbes, "Comparison, Self-Praise and Irony: Paul's Boasting and the Conventions of Hellenistic Rhetoric," *NTS* 32 (1986), 1-30; Lausberg, § 799; Anderson, *Glossary*, 110-111.
- (45) Aristotle, *Rhet.*, 2. 20. 4; Cicero, *De Inv.*, 2. 24. 72-26. 76, *De Or.*, 2. 42. 172.
- (46) *Ad Her.*, 2. 4. 6; cf. Quintilian, 9. 2. 100-101.
- (47) Cicero, *De Or.*, 3. 29. 117.
- (48) Theon, *Progymnasmata*, Spengel, 112-115.
- (49) Anderson, *Glossary*, 73-77.
- (50) Cicero, *De Or.*, 3. 38. 155-42.168.
- (51) Cf. C. J. Swearingen, *Rhetoric and Irony: Western Literacy and Western Lies*, New York: Oxford Univ. Press, 1991; Anderson, *Glossary*, 39-40.
- (52) *Ad Alex.*, 21.
- (53) *Ad Alex.*, 35
- (54) Cicero, *De Or.*, 2. 67. 269-270; 3. 53. 203.
- (55) Philodemos, Bk.4, § 180. col. 24, cf. H. M. Hubbell, "The Rhetorica of Philodemos: and Translation & Commentary," *Transactions of the Connecticut Academy of Arts & Sciences* 23 (1920), 243-382, 299.
- (56) Quintilian, 8. 6. 54-59; 9. 2. 44-50.
- (57) Plato, *Symp.*216e; Cicero, *De Or.*, 2. 6. 270; Quintilian, 9. 2. 46.
- (58) 以下の第1コリント書1-4章の修辞学的分析の本論の要約は、『新約学研究』第34号(2006)に続く。